

## 序 論

本論文は、「私はどのような教会形成を目指すか」を述べたものである。私はクリスチャンとされて、18年近く生かされてきた。その中でさまざまな恵みを受け、問題にぶつかり、考えさせられてきた。

ざっと私のクリスチャンとしての歩みを振り返ってみたい。私は20歳の時、母教会である土浦めぐみ教会で救われ、そこで3年間過ごした。命がけで伝道する牧師の姿に感銘を受け、楽しい交わりに入れられ幸いであった。その後、日本の神学校で3年学び、理想に燃えて牧会に出たにもかかわらず2年で燃え尽き、挫折を経験した。牧師はもうできないと思いつつも、もう一度学びなおしてみたいと願ってアメリカの神学校で7年間、キリスト教教育を学ぶ機会を与えられた。その間に、神の不思議な導きといやしにより、再び牧師として立たせていただくという思いへ導かれていった。この7年間は、新しい経験・学びと共に、自分が過去にやってきたことを、外から見させられ、多くのことを考えさせられた。そして、今年(1998年)4月より、登戸教会に遣わされ、再び牧会に立たされている。

さらに、過去の経験で感謝すべきことは、アメリカにいた期間を含め、合計9年間、牧師を退職し、信徒の立場に戻ったことである。おそらく、牧師を続けていたら生涯気づかなかったようなことを、いろいろ教えられたことは大変、感謝なことであった。

私の牧会理念(mission statement)は、以下の通りである。「私たちは神の家族に加えられ、イエス・キリストに似た者へと変えられ、宣教に励み、神を礼拝する生涯を送る者とされることを目指します。」教会は神の家族であり、そこに一人でも多くの人に加われるように宣教の業に励む。救われて教会に加えられたなら、その後は地上の生涯を終えるまでイエス・キリストに似た者へ変えられて行くこと(聖化)を目指す。その歩みは宣教に励み、神を礼拝する生涯を送るものである。

本論文において、以上の牧会理念に基づいて、私が考えている教会形成全体を詳しく述べるには、時間的制約上、不可能である。そのため、本論文では本論を大きく二つの点にしぼって展開している。第一部では、聖書から見て、どのように教会形成をすべきかを考え、第二部では、教会形成の中でも特に霊的成長について考察してみたい。

## 本 論

本論は大きく二部に分かれている。第一部は教会形成の聖書的土台を考察し、聖書が教えている教会形成はどのようにすべきかを見てみたい。第二部は霊的成長を扱う。教会形成の中心的課題であるキリスト者の霊的成長について、さまざまな面から考えてみたい。

### I. 教会形成の聖書的土台

第一部では、教会形成はどのような聖書的根拠にのっとってなされるものなのかを検討したい。ここでは、人間の目的と性質、教会の定義・目的・機能、ミニストリー概念、牧師について聖書から考察する。

#### A. 人間の目的と性質

教会形成の一番の土台として、人は何のために存在し、どのような状況に置かれているのかを聖書から確認しておく必要がある。

神の人類に対する本来の意図は、人間が「神のかたちに創造された」（創世記 1:27）という、まさにこの事実の中に見られる。「神のかたち」とは、「人格あるいは自己を構成している全て（知性、意志、情緒）を含む本質」<sup>1</sup>である。この人の内に見られる「神のかたち」によって、人は自分に与えられた神の目的を果たすことができるのである。

神が人を創造された目的は、人が神、他の人、自分自身、被造物との関係において、神の栄光を現わし、神に仕えることである（創世記 1:26-28、詩篇 8）。パウロは、1 コリント 10:31 において、人に対する神の期待をわかりやすくまとめている。「こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現わすためにしなさい。」

人は当初、神のかたちに創造されたにもかかわらず、アダムが罪を犯したことにより、それ以降のすべての人が罪人となった（伝道 7:20、ローマ 3:23）。この状況においては、人は神の意図された目的を完全には達成することができない。人は新しく生まれ変わらなければ神を本当に知り、愛することはできないのである（ヨハネ 3:3）。イエス・キリストによって、誰もが罪から救われる必要がある（1 ペテロ 2:24）。新しく生まれた後、人と神、被造物との本来の関係が回復され、神の目的を実現することが可能になるのである。

教会は、神が人に意図された目的を果たせる場、また果たせるように整える場

として形成されなければならない。

## B. 教会の定義、目的、機能

英語の church という語は、ギリシャ後期の kyriakon という「主の家」、「教会の建物」を意味する語から派生している。<sup>2</sup> しかし、新約聖書においては、ギリシア語の ekklesia は、建物という意味はなく、集会、会衆、信徒の集まりという意味で用いられている。<sup>3</sup> エリクソンは、教会を以下のように定義している。「キリストの死によって神と和解され、救われ、新しい命を得た人々すべての集り。天においても地においても、そのような人々すべては教会に含まれる。」<sup>4</sup>

教会の存在目的は、神の栄光を現わし、ほめたたえることである。<sup>5</sup> これは、人間が創造された目的と同じである。教会の存在目的は、パウロの祈りの中によく現わされている。「教会により、またキリスト・イエスにより、栄光が、世々にわたって、とこしえまでありますように。アーメン」(エペソ 3:21)。神の栄光を現わすために、教会には四つの機能がある。それは、礼拝、教育 (edification)、伝道、奉仕である。

教会の第一の機能は、礼拝である。礼拝とは、「神聖な存在に敬意を表して拝むこと」<sup>6</sup>を意味している。その中心は、神と人間との人格的な交わりである。<sup>7</sup> 人間は神を礼拝するために造られたのであるから、広い意味では人間のすべての生活は神をあがめる礼拝でなくてはならない。狭い意味では、礼拝は地域教会によってなされる祭典である。新約聖書によると、この狭義の礼拝には、いくつかの基本的要素がある。例えば、賛美 (ヘブル 13:15、1 ペテロ 2:5)、神の言葉の朗読 (ルカ 4:16-27、使徒 13:15、コロサイ 4:16)、献金 (1 コリント 16:1-2)、バプテスマと聖餐 (使徒 2:41-42) などである。

真の礼拝は、生きたキリストが臨在され (マタイ 18:20、28:20)、聖霊によって力づけられ (ヨハネ 4:24、ピリピ 3:3)、愛に満ちた (使徒 2:46-47、エペソ 4:16) ものである。<sup>8</sup>

教会の第二の機能は信者の教育である (マタイ 28:20、エペソ 4:11-16)。教育とは、信者を霊的に強め、イエス・キリストに似た者へと引き上げることである。教会の教育には 3 つの手段がある。それらは、交わり (1 コリント 12:26、ガラテヤ 6:2)、教授 (マタイ 28:19-20、使徒 18:26、エペソ 4:11、2 テモテ 2:2)、説教 (1 コリント 14:4) である。<sup>9</sup>

聖霊は信徒が互いに教育し合い、高め合うために、各々に御霊の賜物を与えてくださっている (1 コリント 12:7-11)。教育の主要な目的は、神が人に与えられ

た賜物・使命を充分果たせるように、訓練し、励まし、支えることである。

教会の第三の機能は、伝道である。伝道とは、イエス・キリストを信じる信仰によって救われることを願って、まだイエス・キリストを知らない人に福音を伝えることである。大宣教命令において、イエスは弟子たちに言われた、「それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい」(マタイ 28:19-20a)。

聖霊に導かれた伝道によって、未信者と神との関係が回復される。つまり、人間が創造された時に神が意図された神との関係に戻るのである。こうして、人間に与えられた使命を知り、存在目的を果たすことが可能になるのである。

第四の教会の目的は、奉仕である。イエス・キリストが来られたのは、「仕えられるためではなく、かえって仕えるため」(マルコ 10:45)であり、仕える者の模範を示してくださった(ピリピ 2:6-8)。このキリストが教会のかしらであり(エペソ 5:23)、教会はキリストに従うように召されている(エペソ 5:24)。教会に牧師が立てられているのも、「聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ」るためである(エペソ 4:11-12)。各々の信者に賜物が与えられているのは、「その賜物を用いて、互いに仕え合」うためである(1ペテロ 4:10)。

このように、教会は仕える者たちの共同体であり、この世界において地の塩、世の光としての役割を果たすことを神から期待されているのである(マタイ 5:13-16)。

### C. ミニストリーの概念

聖書的なミニストリーの概念は、「神や人になされたサービス(奉仕)」<sup>10</sup>と行うことができる。イエス・キリストが救い主であり、主であるから、すべてのミニストリーはキリストのミニストリーに習うべきである。キリストは、地上においてご自分のミニストリーを、「聖霊という人格によって永遠に臨在しておられるご自分の体である教会を通して(ヨハネ 14:15～、1コリント 12:4～、エペソ 1:22,23、4:1-16、参照マタイ 28:18-20)」<sup>11</sup>続けておられるのである。

クリスチャンのすべてのミニストリーは、イエス・キリストが示された僕としてのミニストリーの延長である。キリストに仕えるように、他者に仕えるべきである(マタイ 25:40、エペソ 5:22、6:5-8)。

使徒後の時代においては、ミニストリーは特定の人々に限定されたが、新約聖書においては、専門家と非専門家のミニストリーの区別はされていない。ミニス

トリーという言葉は、リーダーシップを託された人と信者すべての両方の働きを指して用いられている。<sup>12</sup> すべての信者は、「選ばれた種族、王である祭司」（1ペテロ 2:9）であり、イエス・キリストによって父なる神のために祭司とされているのである（黙示 1:6）。クリスチャン生活のすべてが、神への祭司としての奉仕によって聖別されるべきなのである（ローマ 12:1）。

ミニストリーがすべての信者のものであることは、御霊の賜物が教会に属する一人一人に与えられていることによっても明らかである。聖霊は意図的にご自分の賜物を各々の信者に分け与えている（1コリント 12:11、エペソ 4:11）。すべての御霊の賜物は、「みなのため」（1コリント 12:7）、教会を建て上げるために与えられている。誰一人としてすべての賜物を持っている者はなく（1コリント 12:14-21）、すべての信徒が同じ賜物を持っているのでもない（1コリント 12:28-30）。それ故、すべてのメンバーがキリストの体である教会にとってなくてはならないのである（1コリント 12:22-26）。

## D. 牧師

すべてのキリスト者が祭司であること（万人祭司）は、牧師職が不要であるということではない。<sup>13</sup> ここでは、牧師職の起源と発達、牧師の資格、牧師の権威、牧師の職務、牧師のリーダーシップについて考察したい。

### 1. 牧師職の起源と発達

新約聖書における牧師職<sup>14</sup>は、ユダヤ教の起源を持っている。1世紀のどのユダヤ人のコミュニティーにも、市民生活と宗教生活双方に関する責任を負った長老たちの議会があった。長老たちは、コミュニティーによって選ばれ、厳粛な儀式のもとで終生その職に任命された。最も重要な議会が、エルサレムにおけるサンヘドリンであった。それはユダヤ人の最高裁判所としての役割を果たした。長老たちの主要な働きは、律法を研究し教え、違反者に対して適用することであった。<sup>15</sup> この長老職が牧師職の起源であった。

初代教会が始まった頃、ミニストリーはすべての信徒によっていた。弟子たちは自分たちの職務に監督（episkopos）というタイトルをつけなかった。教会が信仰の正しい道にとどまっていられるように牧会する責任はすべてのメンバーに課せられていた（ヘブル 12:15）。<sup>16</sup>

教会の働きが進むにつれて、ミニストリーの形態は少数による監督制へと変わっていった。「監督の職」（episkope）という語は1テモテ 3：1で初めて使用さ

れている。牧会書簡においては、すでに牧会者の集りができていたことや、いくつかの教会を監督する者がすでに存在したことを示唆している。これは、テモテやテトスなど、使徒の弟子という形で現れている。テトスはパウロの指図に従って町ごとに長老たちを任命するようになっている（テトス 1:5）。<sup>17</sup>

2, 3世紀になると、教会内のすべての職務を統括する一人の監督が現れるようになった。それは、その個人の並外れた賜物にもよるであろうし、よりきちんとした組織が求められていたことにもよるであろう。<sup>18</sup>

このようにして、牧師職は始まり、時代と共に形態が変化していった。

## 2. 牧師の資格

牧師の資格に関して、聖書には1テモテ 3:2-7 とテトス 1:6-9 に詳しいリストがある。これらの資格は大きく4つに分類できるであろう。第一に自制心のある人格者であること、第二に人間関係がよいこと、第三に教える賜物があること、そして第四に正しい教えを守っていることである。

第一の自制心のある人格者であることには、具体的に以下の資格が含まれる。非難されるところがなく、ひとりの妻の夫であり、自分を制し、慎み深く、品位があり、わがままでなく、短気でなく、酒飲みでなく、暴力をふるわず、温和で、争わず、金銭に無欲で、不正な利を求めず、善を愛し、正しいこと。

第二の人間関係がよいことには、以下の資格が含まれる。よくもてなし、自分の家庭をよく治め、十分な威厳をもって子どもを従わせ、教会外の人々にも評判のよいこと。

第三の教える賜物があることは、教える能力があること。

第四の正しい教えを守っていることには、具体的に以下の資格が含まれる。教えにかなった信頼すべきみことばをしっかりと守っており、敬虔で、信者になったばかりの人でないこと。

## 3. 牧師の権威

天と地のすべての権威はイエス・キリストに与えられている（マタイ 28:18）。このキリストが、教会の頭(かしら)である。したがって、イエス・キリストこそ教会における権威である。

新約聖書において、地域教会は自主的に運営されていた。そこには、絶対権威者はいなかった。たしかに、地域教会は、使徒や使徒の代理人に対して従っていたが、パウロや他の使徒たちでさえ、自分たちの権威を宣べ伝えられた言葉に置

いていた（1コリント 11:23、15:3-5）。つまり、地域教会はイエスの權威に従っていたのである。

牧師の權威は、その職位自体にあるのではなく、イエス・キリストを源とするものである。牧師の權威は機能的なものであって、地位的なものではない。<sup>19</sup> イエスから委ねられた働きを忠実に果たしていく時、神の權威が牧師を通して現わされるのである。イエスが啓示された言葉をどれくらい忠実に伝えるか、その程度によって、牧師の權威は決定されるのである。<sup>20</sup>

#### 4. 牧師の職務

牧師の職務は、大きく分けて、ヴィジョンを持つこと、管理運営、牧会、教授の四つがある。

##### a. ヴィジョンを持つこと

日本での開拓伝道にも携わったことのある、宣教学の専門家であるヘッセルグレーブは、開拓伝道は「すべてのことが一連のプロセスにおける特定の部分となるように、最初から到達点を見通して行なう」<sup>21</sup>べきであると述べている。つまり、回心から成熟に向かう明確な弟子化のヴィジョンが必要であることを強調している。

新約聖書において、長老は「指導の任にあたる」（1テモテ 5:17）ものとされている。これは、教会での教え、伝道、組織化されたミニストリーすべてに方向性を与えることを意味している。<sup>22</sup> 牧師は、牧会理念、牧会哲学とも言える統一的なヴィジョンが必要であり、それが教会のミニストリー全体に方向性を与えて行くのである。もちろん、このビジョンは自分勝手な幻ではなく、聖書に基づいて、神から与えられたその教会が果たすべき使命でなければならない。<sup>23</sup>

##### b. 管理運営（アドミニストレーション）

新約聖書で用いられている監督という語（episkopos）は、前置詞 epi「上に」と skopeo「見守る」とが合わさった語であり、文字通りには「上に立って見る人」という意味である。それゆえ、監督とは、教会を見守る責任が与えられた地位のことを指している。<sup>24</sup> この監督というイメージは、牧師の管理運営、指揮監督する働きを現わしている。

### c. 牧会 (pastoral care)

牧師という言葉は、羊飼いを意味している。羊飼いは群れを養い、世話をする。聖書にあるよい羊飼いのモデルは、イエス自身である。天に昇られたキリストは、牧師という賜物を教会に与えられた (エペソ 4:8, 11)。

牧師は群れ全体に気を配るだけでなく (使徒 20:28)、一人一人をよく知り (ヨハネ 10:3, 14)、先頭に立って導き (ヨハネ 10:4)、羊のために命を捨て (ヨハネ 10:11)、内外の敵から保護する (使徒 20:29-31)。また、牧師は迷い出た羊を捜しに行く (マタイ 18:12-14、ルカ 15:4-7)。

牧会には、励ましと訓戒も含まれる。パウロはエペソの長老たちに、「労苦して弱い者を助けなければならない」 (使徒 20:35) と語っている。これには、病気の人のために祈る (ヤコブ 5:14) ことも含まれている。信徒を訓戒し (1テサロニケ 5:12)、誤りを正すことも牧師の務めである。

### d. 教授 (instruction)

教授は、管理運営や牧会と切り離しては考えられない。エペソ 4:11 においては、牧師と教師は同一人物である。牧師の資格の所でもすでに見たように、牧師 (監督) は「教える能力があり」 (1テモテ 3:2)、「教えにかなった信頼すべきみことばを、しっかりと守って」 (テトス 1:9) いなければならない。「それは健全な教えをもって励ましたり、反対する人たちを正したりすることができるため」 (テトス 1:9) である。したがって、牧師は聖書の教えをよく知り、自分自身でも守り、教えることができなければならない。こうして、群れを神のみことばで養うのである。

## 5. 牧師のリーダーシップ

牧師のリーダーシップの性質には、リーダーと、しもべという二つの面がある。

### a. リーダーとしての牧師

牧師は、「神の教会の世話」をしなければならない (1テモテ 3:5)。「よく指導の任に当た」るべきである (1テモテ 5:17)。牧師は、神の権威を地上において代理する者である。説教において、カウンセリングにおいて、神の権威ある言葉を人々に取り次ぐ責任を与えられている。神から示されたヴィジョンによって群れを導いていくのである。牧師は教会のリーダーとして、神によって立てられているのである。



## b. しもべとしての牧師

権威を持つ者は、自分がとても危険な立場にあることを自覚していなければならぬ。牧師は絶えず神の権威を代理していることによって、あたかも自分自身に権威があるかのような錯覚に陥りやすい。その結果、謙虚に人の意見に耳を傾けることをせず、自己防衛的になり、神の導き以上に自分のやり方を押し通すという高慢、傲慢のわなにはまりやすい。

しかし、信仰の本質は、権威を行使することと正反対のことである主イエスへの服従である。「牧会上の要請として、どれほど牧師が主の名によって権威をもって語り、また行動しようとも、キリスト者としての私たちのアイデンティティーは『仕える者』としてのそれである。」<sup>25</sup>

リーダーが仕えるしもべであることは、イエスの生涯と教えによく現わされている。パウロは次のように、表現している。「キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。」(ピリピ2:6-8)。

イエスは弟子たちに、神の国のリーダーシップスタイルはこの世のものとは異なることを、次のように教えられた。「あなたがたも知っているとおおり、異邦人の支配者と認められた者たちは彼らを支配し、また、偉い人たちは彼らの上に権力をふるいます。しかし、あなたがたの間では、そうではありません。あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、みなに仕える者になりなさい。あなたがたの間で人の先に立ちたいと思う者は、みなのもべになりなさい。人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです。」(マルコ10:42-45)。

イエス・キリストは、真のしもべとしてのリーダーシップの模範を示してくださいました。デヴィッド・メインズは、リーダーシップとしもべであることとの関係を次のように述べている。「リーダーシップは職務を表している。しもべであることは、その職務の遂行の仕方を表している。」<sup>26</sup>

## II. 靈的成長

本論の第二部においては靈的成長について考察する。キリスト者の靈的成長は、教会形成の中心的課題である。ここでは、靈的成長の目標、特徴、妨げている問題、靈的成長を目指す教育について考える。

クリスチャンは、救われた後、イエス・キリストに似た者へと変えられて行く聖化の過程に入れられている。つまり、地上の生涯を終えるまで靈的成長を続けることを期待されている。靈的に成長することが、人間が創造された目的であるところの神の栄光を現わすことにつながるのである。

### A. 靈的成長は何を目指すか

靈的成長という場合、具体的にどのような目標をめざして成長に励むのかを知ることが大切である。決勝点がどこかわからないような走り方をして、無意味な努力をしないようにするためである（1コリント 9:26）。

神は靈である（ヨハネ 4:24）。その神が、土地のちりて人を形造り、その鼻にいのちの息（神の靈）を吹き込まれた。それで、人は生きものとなった（創世記 2:7）。このように、人の靈は神御自身から来ている。神は人を、神のかたちに創造された（創世記 1:27）。したがって、靈的成長のゴール（靈的成熟）は、人間に与えられた靈の源である神ご自身の性質の内に見られるはずである。しかも、それは、神のみに見られる性質ではなく、人間にも見出される性質でなければ、人間にとって目標とはならない。

したがって、キリスト者が目指すべき究極の靈的成熟の姿は、神の流通属性（communicable attribute）のうちに見られる。神の流通属性とは、被造物である人間にも見出される神の本質存在に固有の性質である。<sup>27</sup>

神の流通属性には、以下のようなものがある。正しいことができる力（創世記 17:1、18:14、エレミヤ 32:27、ルカ 1:37、マルコ 10:27）、真理を知ること（ヨハネ 14:6、詩篇 139:1-12、147:5、ヘブル 4:13、ローマ 11:33、16:27）、善（出エジプト 33:19、詩篇 31:19、145:7）、聖（レビ 11:44、19:2、ヨシュア 24:19、1サムエル 6:20、詩篇 22:3、イザヤ 57:15、黙示 4:8）、義（詩篇 145:17、イザヤ 45:21、ローマ 1:17、3:26）、正しさ（申命記 32:4、1ヨハネ 1:9、黙示 15:3）、愛（申命記 7:7-8、1ヨハネ 4:8-10）、一貫性（詩篇 33:11、102:27、マラキ 3:6、ヤコブ 1:17）など。

以上の神の流通属性は、「いつも共になっていて、正しい行動につながる。つ

まり、神は知恵があるので、何をすべきかを知っておられる。善であるので、正しいことをすることを選ばれる。力があるので、しようと望まれることをすることができる。」<sup>28</sup> これが、人間が目指すべき霊的成熟の姿である。

霊的成熟は、イエス・キリストの人格と行為においても見ることができる。キリストは、神の完全なかたちを見せてくれた（ヘブル 1:3）。クリスチャンにとっての目標は、キリストと同じかたちになって行くことである（2コリント 3:18）。パウロはローマ 8:29 で、「神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められた」と言っている。ここで言われているのは、単なる外的な類似性ではない。そのものをそのものたらしめている特性、本質すべてが似ることを意味している。<sup>29</sup>

キリスト者が習うべきイエス・キリストの霊的成熟の姿は、3つに要約できる。<sup>30</sup> 第一に、天の父と完全な交わりを持っていた（ヨハネ 17）。第二に、天の父の意志に完全に従われた（ルカ 22:42、ヨハネ 4:34、5:30、6:38）。第三に、人々に対して全き愛を示された（マタイ 9:36、マルコ 1:41、ルカ 7:13）。このイエス・キリストの生き方が、キリスト者にとっての霊的成長の目標である。

## B. 霊的成長の特徴

霊的成長には、少なくとも7つの特徴が見られる。それらは、神と人との共同作業、キリストとの一体化、生涯に渡る過程、霊的戦い、全人的関わり、個人次元と共同体次元における霊的成長である。

### 1. 神と人との共同作業

神が霊的成長を導いてくださる方である。パウロは言っている、「私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です。」（1コリント 3:6）。

神は自然に、また超自然的に働かれる。神は、人間を自然の発達過程に従うように創造された。神はまた、人の霊的成長を超自然的な介入によって助けられる。霊的成長は、キリスト者の内に住んでくださっている聖霊によってもたらされる（ローマ 8、2コリント 3:18、ガラテヤ 5:16、22-23、25）。もし、キリスト者がどんな時にもどこにおいてもキリストに従うなら、内なる聖霊がキリストに似た者へと変えてくださるのである。

神は、すべての人間の経験を霊的成長の機会として用いてくださる。苦しみは、霊的成長の大きな機会である。キリスト者は神の子供として、苦難が霊的成長をもたらす矯正的、教育的な訓練としてみなすべきである（ヘブル 12:5-11）。

霊的成長は神の業であるが、キリスト者は自分の霊的成長に対して責任がある。キリスト者は、神からの働きかけに対して、聖霊の力によって応答する。聖霊の働きに対して、オープンでなければ成長はない。み言葉とあらゆる経験を通して、神が自分を変えてくださることを、たえず求めるべきである。

## 2. キリストとの一体化

霊的に成長するためには、聖霊によってキリストに結び付けられる必要がある。「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。」(ガラテヤ 2:20)。イエスは、たとえの中でこの点を明らかにしておられる。「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。」(ヨハネ 15:5)。

もし、私たちがイエスの戒めを守るなら、イエスの愛にとどまることになる(ヨハネ 15:5)。そして、イエスの戒めとは、「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合うこと」である(ヨハネ 15:12)。このように、イエスの模範に習い、イエスの戒めに従い、神と人とを愛することが重要である。

J. C. ライルは、主イエスとの親しい交わりを次のように説明している。「私たちはどんな必要な時にも、まず主に向かう必要があることを知らねばならない。すべての困難を主に話し、一步一步を主に相談し、私たちの悲しみをすべて主の前に広げ、私たちの喜びすべてを主と分かち合い、すべてのことを主の御前でなし、毎日主に頼り、主に目を向けて歩まねばならない。」<sup>31</sup>

私たちは、キリストと一体化することによって、私たちから罪を取り去り、聖くする聖書の基準に従って生きることが可能になる(ガラテヤ 5:13-26、コロサイ 3:1-10)。私たちは、罪と戦うべきであり(ヘブル 12:4)、御霊によって、体の行ないを殺すべきである(ローマ 8:13)。そして、私たちの体を「神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげ」(ローマ 12:1)ることが大切である。

## 3. 生涯にわたる過程

霊的成長は、生涯にわたって続く過程である。パウロは、「私たちはみな、、、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられていきます」(2 コリント 3:18)と言って、霊的成長が継続的なものであることを教えている。同様に、第2 コリントの4章16節では、「たとい私たちの外なる人は衰えても、内なる人は

日々新たにされています。」とある。コロサイ 3:10 においても、「新しい人は、造り主のかたちに似せられてますます新しくされ、真の知識に到るのです。」と述べ、キリスト者の成長は一時的なものでないことを強調している。

このように、キリスト者は聖霊の働きによって、日々、成長し、キリストの死と復活との現実を生きるのである。この霊的成長の過程は、キリストが再び来られる時に完成する（1テサロニケ 5:23、2ペテロ 3:14）。

#### 4. 霊的戦い

霊的に成長することは、サタンとこの世に対する霊的戦いもかかわっている（エペソ 6:11-18、1ペテロ 5:8-9）。サタンは、私たちの罪の性質に働きかけて誘惑し、成長を妨げる。この世も、人間の罪の性質を反映しており、キリスト者の成長を阻む大きな力である。たとえ、みことばを聞いても、世の心づかひや、富の惑わし、その他いろいろな欲望がはいり込んで、みことばをふさぎ、実を結ない（マルコ 4:19）ことがよく見られる。

クレイグ M. ゲイは、この問題を以下のように指摘している。「世俗化のプロセスによって特別に強く社会構造的に影響され、私たちの霊的エネルギーは永遠の事柄でなく、一時的な事柄に注がれるようになってしまっている。」<sup>32</sup> たとえクリスチャンの信仰であっても、個人的な成功や、自己実現、心理学的幸福といった「この世的」目標に仕えるために用いられることがある。<sup>33</sup>

それ故、キリスト者はこの世にあって、この世のものでない生き方をしなければならない（ローマ 12:2）。「父なる神の御前できよく汚れのない宗教は、孤児や、やもめたちが困っているときに世話をし、この世から自分をきよく守ることで」（ヤコブ 1:27）。神の民は、神が聖であるから自分たちも聖でなければならない（レビ 11:44-45、19:2、20:26、1テサロニケ 4:7、1ペテロ 1:15-16、1ヨハネ 3:3）。キリスト者は、不道德、倫理に反する態度、行ないに関わらないようにすべきである。

#### 5. 全人的関わり<sup>34</sup>

霊的成長は、人の一部分だけ（例えば、魂）がかかわっているのではなく、全人的に関係している。人間の発達には、身体的、知的、情緒的、社会的、道徳的という5つの側面で観察することが可能である。これら5つの側面は、相互に関連し合っていて分離することはできない。人間の霊は、これら5つの側面の中心に位置し、すべての側面と緊密に関わっている。テッド・ワードは、以下のような

手のひらのモデルを用いて、このことを説明している。

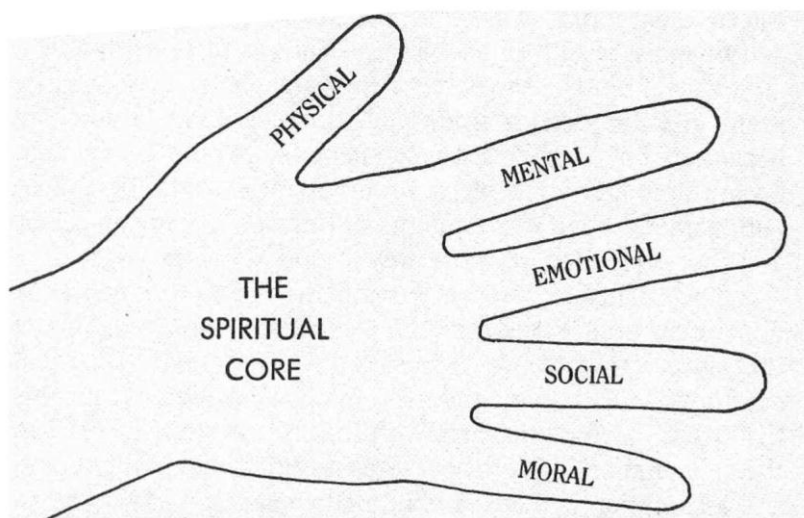


図1. 霊的成長の全人的モデル

人が救われる時、聖霊が人の霊に入ってきて、死んでいた霊が生き返るのである（ヨハネ 3:5、2 コリント 1:22、テトス 3:5）。人間の霊が、神との交わりの中心になる。

人間の5つの側面の各々における成長が、霊的成長に貢献する。また、霊的な成長は5つの側面を通して現れる。霊的成長は、聖書の真理を知り（知的）、神と人を愛し（情緒的）、よい人間関係を築き（社会的）、正誤を正しく判断できる（道徳的）というような形で現わされる。

## 6. 個人次元における霊的成長

キリスト者の個人生活においては、聖書と祈り、賛美を通しての神との個人的な交わりが霊的成長の基礎である。この個人レベルでの神との交わりは、決して自己満足、自己充足で終わってはならず、実際に神や人に仕えることに結びつくべきである。神の愛を実践することが、霊的成長には不可欠である。

神の愛を実践することに関連して、先の「霊的戦い」の中でも考察したが、この世に関わることと、この世から離れることのよいバランスをとることが大切である。聖さを維持し、さらに聖くなるためには、この世とのなんらかの分離が必要である（2 コリント 6:17）。しかし、キリスト者はこの世に地の塩、世の光

としてとどまることを神から期待されている（マタイ 5:13-16）。

## 7. 共同体次元における霊的成長

霊的に成長するためには、共同体の中で暮らすことも大切である。家庭や地域教会において、互いに愛し、赦し合い、訓練し合うような関係の中で、キリスト者は霊的に成長する。私たちがキリストと結び付けてくれる聖霊は、キリストの体なる教会にも結び付けてくれる。聖書は、信仰者が他の信仰者から孤立して生きることを教えていない。

また、聖書も個人に与えられたものであるよりも、教会に与えられたものであるとの認識が大切である。個人の限られた経験、視点を通して聖書を読んでいただけでは、不十分である。一人一人がみ言葉を通して与えられた恵みを分かち合うことによって、本当の聖書の豊かさを味わうことができるのである。そこに教会としての交わりの豊かさ、霊的な成長を経験できるのである。

「使徒たちは、クリスチャン生活と聖化の歩みは、愛といたわり合う交わりの中でなされることを描いていた。私たちの誰もが持っている個人的弱さ、人格の欠陥、問題は、キリストの体の他のメンバーによって補われ、支えられ、いやされる。このことは誤解されてはならない。というのは、神は私たちが個人として直接取り扱われるからである。クリスチャンは各々、犠牲を払った罪からの個人的悔い改めを命じられており、最も高い基準の聖さも要求されているのである。」<sup>35</sup>

すでに見たように、すべての御霊の賜物は、「みな益となるために」（1 コリント 12:7）与えられている。キリストの体を建てるためには、すべてのメンバーが互いに必要なのである（1 コリント 12:22-26）。キリストの体を建てることには、霊的成長が当然含まれている。礼拝、互いの教育、伝道や奉仕に参加することによって、キリスト者は個人としても教会全体としても成長していくのである。「恵みは各々の信者と神という縦の関係によってだけでなく、横の関係であるキリストの体を通して伝えられる。… 個人の霊的ダイナミクスと集団としての霊的ダイナミクスは、相互依存の関係にある。それはちょうど、体の健康と各々の細胞の健康とが相互依存関係にあるのと同じである。」<sup>36</sup>

## C. 霊的成長を妨げている問題

日本の教会において、霊的成長を妨げている問題として、四つの問題を取り上げてみたい。四つの問題とは、牧師と信徒の分離、日曜日とあとの6日間の分離、制度主義、教会活動における教育的要素の欠如である。

### 1. 牧師と信徒の分離

これは個々の教会によって差があるが、一般的に言って、日本の教会においては牧師と信徒が明確に区別されている。牧師は教会内で権威として見られ、信徒は牧師を助けることを期待されている。牧師は教え、信徒は聞く。牧師は与え、信徒は受ける。牧師は日曜礼拝において主要な役割を果たし、信徒は受身である。プロテスタントの教会であっても、第一に牧師、第二に役員、第三に信徒という目に見えない階級のようなものが存在している。

このような分離は牧師、信徒双方の霊的成長にとって望ましくない面が見られる。特に多くの牧師は、信徒から学ぶ姿勢がなく、自分の意見に異議をとねえる信徒は「不信仰」であるとか、「霊的一致を乱す者」というレッテルを貼りやすい。また、信徒にとっても自分たちは受ける人という意識が強く、万人祭司という考えは掛け声だけに終わっている。このような牧師と信徒の分離は、互いに学び合い成長するという学習共同体、霊的共同体の育成をはばんでいる。

こういった分離は、おそらく宣教師によって日本に導入されたものであろうが、日本文化によってさらに強化されてきたと思われる。日本文化の大きな特徴の一つは、階層的構造である。グループ内にもグループ間にも、歴然とした上下関係が見られる。一つのグループの各メンバーは、自分の年齢、性別、社会的地位などによってグループ内での位置を知っている。この日本文化の特徴が、教会内の人間関係にも大きく影響していると考えられる。

聖書的に見ると、牧師と信徒という区別は基本的に機能に関するものである。牧師の主要な任務は、「聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げる」(エペソ 4:11) ことである。教会にリーダーの賜物が与えられていることは、「クリスチャン生活の2層モデルを意味していない。…『フルタイムーたち』は、何という名称であれ、決して彼らの教会の信徒より『上』でも『より重要』でも『より神に近い』わけでもない。」<sup>37</sup>

すべての御霊の賜物は「みなのため」(1コリント 12:7)、別の言葉で言えば「キリストのからだを建て上げるため」(エペソ 4:12) に教会に与えられているのである。したがって、牧師は与えられている賜物を、自分の益のためで



はなく、教会全体を高めるために用いるべきである。牧師の立場は、特権というよりも神から与えられた責任と受け取るべきであろう。「それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。」（1ペテロ 4:10）。

坂野慧吉氏は、今までは自分が教え、導いて、人を成長させる牧会をしてきたが、これからは信徒と共に成長する牧会を目指すべきであることを、いろいろな経験を通して、教えられたと述べている。<sup>38</sup>

## 2. 日曜日とあとの6日間との分離

日本の教会においては、日曜日とあとの6日間（月曜から土曜まで）が分離しがちである。つまり、日曜日の教会生活は信徒の日常生活から分離している。神の言葉が信徒の日常経験から遊離しがちなのである。

その理由は三つ考えられる。第一に、多くの牧師が一般社会で働いたことがないため、一般信徒の気持ちを理解できず、み言葉を適切に力強く適用できない。

第二に、牧師と信徒の意識の大きな差によって、この分離が生じていると考えられる。牧師の主要な関心は日曜のプログラムを円滑にこなすことになりがちであり、実際に信徒一人一人の痛みや苦しきまで理解していないことが多い。牧師は、月曜日から土曜日までは日曜日の準備のためにあるという意識である。したがって、信徒が礼拝に出席して当然と考える。しかし、信徒にとっては、多くの犠牲を払って、礼拝に出席している場合が多い。日曜日は月曜日から土曜日までの準備、あるいは忙しい生活の中の一時的休息なのである。だから、「礼拝によって、励まされたい」、「今からの6日間のエネルギーを得たい」と真剣に求めている場合が多い。

第三に、より根本的な問題として、「ミニストリー（奉仕）」の概念が十分に理解されていないことが考えられる。ほとんどの場合、牧師も信徒もミニストリーを会堂内の活動と伝道を意味するものとしてとらえている。したがって、会堂内での活動は奉仕としてみなされるが、会堂外の活動は伝道を除いて、一般に奉仕とは考えられていない。

しかし、先にも見たように、聖書的なミニストリーの概念は、「神や人になされたサービス（奉仕）」のことである。新約聖書においては、職業的、非職業的ミニストリーの区別はされていない。ミニストリーという言葉は、リーダーシップを託された人と信者すべての両方の働きを指して用いられている。したがって、もし神の栄光のためになされる行為であるなら、それが会堂内で行われることであ

ろうと、日常生活（家庭、職場、学校、地域社会）で行なわれることであろうと、すべてミニストリーである。

上記の問題と関連して、「教会」という概念理解の不十分さも、日曜日と他の6日間の分離の原因になっていると考えられる。ほとんどすべての日本のクリスチャンは、日曜の朝ごとに「今日は、教会に行く」と思って礼拝に出て行く。教会という言葉が使われる時は、ほとんどが会堂のことなのである。このような理解の結果、会堂の中にいる時は教会にいるという意識があるが、会堂から一步外に出るともはや教会という意識はなくなるのである。そのため、月曜から土曜までの6日間は、心理的に教会から離れているのである。このような教会のイメージを図で表すと以下のようなになる。

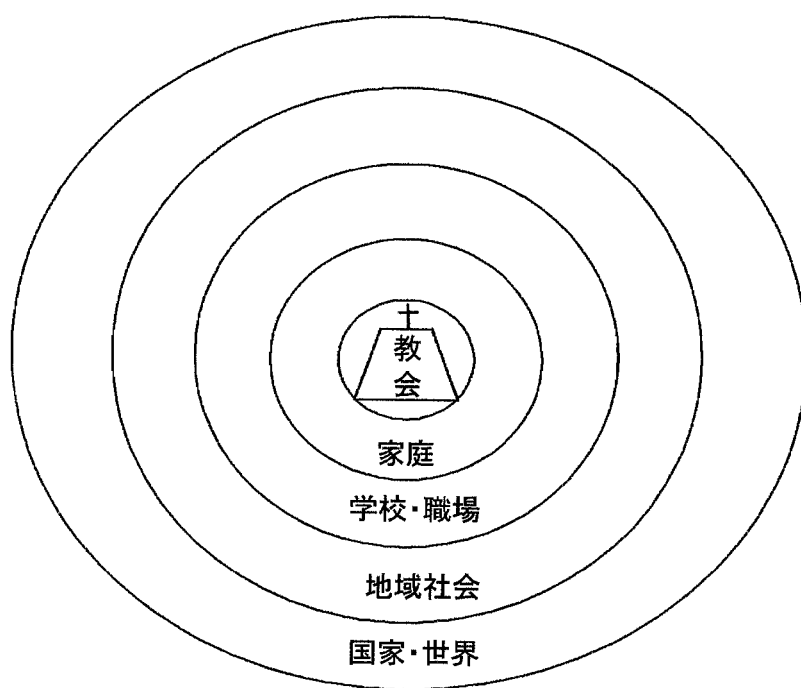


図2. 従来の教会のイメージ

これも先に考察したように、聖書で用いられている「教会」という語は、会堂を意味しているのではなく、集会、会衆、信徒の集まりという意味で用いられている。教会はキリストを信じる信徒の集りのことであり、たとえ会堂がなくても教会は存在するのである。したがって、教会は一週7日間すべて存在するのである。日曜日は集まった状態の教会であり、あとの6日間は散らばった状態の教会である。しかし、たとえ散らばった状態の教会であっても、信徒一人一人の関係

は切れておらず、キリストを中心にして祈りと霊の交わりによってつながっているのである。

牧師も信徒も、自分たちがいつもミニストリーの現場にいることを認識すべきである。すべてのクリスチャンがイエス・キリストの代理人として召されているのであり、どこに置かれていても主のミニストリーを続けて行なっていくことを期待されているのである。

したがって、牧師は信徒が彼らのミニストリーを効果的に実行できるように、整え、訓練し、支えなければならない。地域教会は、神の民がミニストリーを充分果たせるように整えるセンターである。日曜日に教会は集まった状態で、整えられ、力を受けて、奉仕の現場に遣わされる。あとの6日間は、散らばった状態の教会で力強くミニストリーを遂行していくのである。教会はこの集まった状態と散らばった状態の伸縮を繰り返しながら、たえず神の国を成長させていくアメーバのような有機体なのである。この教会のイメージを図で表すと以下になる。

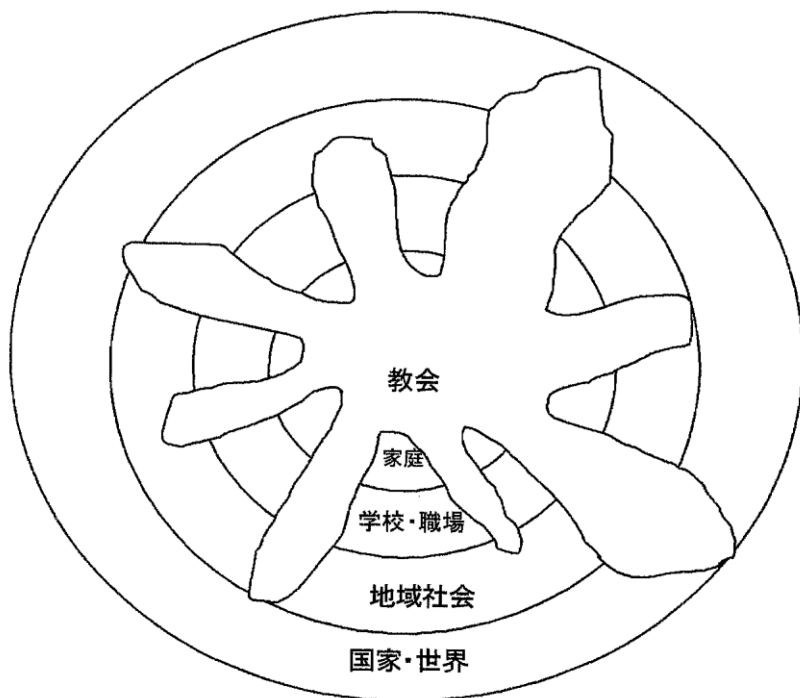


図3. 聖書的教会のイメージ

### 3. 制度主義 (institutionalism)

多くの日本の教会は、神から与えられている教会の目的を果たす以上に、現在あるプログラムを維持し、制度そのものを支える傾向が見られないだろうか。制度主義は次の3つの面で顕著に現れている：人数志向、形式主義、集団主義。

#### a. 人数志向

人数志向は、一言で言えば「大きいほどよい」という考えである。もちろん、多くの人々が救われることは素晴らしいことであるが、ここで問題にしているのは、教会の第一に目指すべきものが聖書に基づいた健全性になっておらず、実際は「人数」が目標になっている点である。受洗者数、礼拝出席者数は統計処理上、意味あるであろうが、それが勤務評定のようにないであろうか。牧師の集りにおいて、教会員数が多くなければ発言力がないという状況はないであろうか。

後藤敏夫氏は、次のようなヘンリ・ナーウエンの言葉を引用している。「福音派の人たちは、一人でも多くの人たちをキリストに導くために一生懸命活動しておられる。しかし、個々の人々は霊的に非常に渇いている。福音派の運動というのが、サクセス・オリエンテッド・カルチャー（成功志向文化）の犠牲に、えじきになっている。」<sup>39</sup>

人数志向の原因としては、ビジネスモデルの教会への影響とリバイバル運動の伝統が考えられる。日本の教会は、「大きいほどよい」という日本のビジネスの価値観の中に置かれており、先のナーウエンの指摘のように、無意識のうちにこの価値観を教会の中にも取り込んでいるように思われる。また、宇田進氏が指摘しているように、日本の福音派に大きく影響を与えてきたリバイバルズムの伝統は、回心者の人数を重んじることであった。<sup>40</sup>

人数志向が聖書的でないことは、明らかである。クリスチャンは神に忠実であることが求められ（1コリント 4:1-2）、「神の国とその義とをまず第一に求め」（マタイ 6:33）ることを期待されている。教会は神が望まれる姿に変わっていけば、多くの場合、結果として人数的にも成長すると考えられる。

#### b. 形式主義

形式主義も制度主義の別の面を現わしている。多くの日本の教会は、戦後宣教師たちが海外から持ってきた伝統を忠実に守っている。当時、日本にはキリスト教の背景はほとんどなかったため、それらの伝統をクリスチャンとして守るべき「真理」として受け入れたようである。その結果、多くの日本の教会が、今では

宣教師たちが驚くほどの厳格な礼拝スタイルとプログラムを熱心に守っているのである。そこでは、聖霊が自由に働くことができず、命と喜びを失っている場合がよく見られる。

### c. 集団主義

制度主義の3番目の特徴は、集団主義である。組織は、それに所属する人々を組織の基準に同一化するように作用する。ハワード A. スナイダーはこの傾向を以下のように描いている。「組織は独自の神話とモラルを創造する傾向がある。組織はリアリティーを自分の言葉で定義する。正しいとは、その定義において、その組織が希望することであり、間違うとは、その組織に反対することである。これはすべての組織に当てはまることであるが、宗教的組織において特に顕著である。そこにおいては、聖なるオーラをまとっているからである。」<sup>41</sup>

つまり、宗教的組織は「これは聖である」、「これは真理である」と理由づけすることによって、一般の組織以上に自分の組織に忠実な人々をつくりだしていく傾向が見られるのである。

教会において霊的一致は重要であるが、真の権威である神以上に、牧師や組織への忠誠心が育っている場合、健全な成長は困難である。

以上、考察した制度主義の3つの特徴である、人数志向、形式主義、集団主義は、いずれも本来の教会の目的が見失われ、2次的なものである人数やプログラム、組織への忠誠・維持が第一の目的に取って代わっているのである。

## 4. 教会活動における教育的要素の欠如

日本の教会において、教会教育と言うと教会学校のことであると考えられている。もちろん、教会学校は教会が行なう重要な教育機関である。しかし、この一般認識が示すように、その他のプログラムにおいては、教育的要素についてはほとんど考慮されてこなかった。実際は、礼拝であれ、祈祷会であれ、教会がかかわっていることで、教育的要素を含んでいない活動は皆無である。

ほとんどの日本の教会は、人口の99%の未信者への伝道に力を入れ、受洗者を生み出すことを目標としてきたので、教会活動における教育的要素までは考えてこなかった。多くの牧師は、信徒に対して「聖書を読みなさい、祈りなさい、集会に出席しなさい」と繰り返し、それをすれば自然と霊的に成長するものと考えてきたようである。また、日本の学校教育の影響と思われるが、実際、今まで教会学校でなされてきたことも、聖書の知識を得ること自体が目標とされてきたよ

うなところがあった。

このように日本の教会は、靈的成長に関する一貫した全体的な視点を持ってこなかった。そのため、何のためにしているのか目的が曖昧なまま、プログラムを継続していることがよくある。評価する視点がないため、どこをどう変え、どのプログラムをなくし、どのような新しいプログラムが必要であるのかよくわからないことがよく見られる。

#### D. 靈的成長を目指す教育

今まで、靈的成長の目標、特徴、妨げになっている問題について見てきた。それでは、どうしたら実際に靈的成長を促進することができるのだろうか。それには2つの教育的アプローチが考えられる。一つは社会化であり、もう一つは意図的教授である。この2つのアプローチについて考えた後、靈的成長を促進するための牧師の役割について考察し、最後に教会への提言を試みたい。

##### 1. 社会化 (socialization)

普通は意識されていないが、最も効果的な学習は社会化によってなされる。人は誰もが、他人の行動を観察し模倣している。私たちは、生まれた時から、親や兄弟、友人などのしていることを真似して大きくなってきた。

イエスが弟子を教育された方法も、社会化が大きなウエイトを占めている。聖書もしばしば、特定の人物が信仰の模範であると述べている(ヘブル 11章など)。モデリングと模倣は、「聖書的教育方法であり、神がデザインされた人間の学習方法と一致している。」<sup>42</sup>

社会化の中でも、宗教を社会化によって身に付けることは、3つの要素が大きく関わっている。第一に両親の宗教性と宗教習慣、第二に同年代の仲間の宗教性(特に大人にとっては、配偶者の宗教性)、第三に教会での社会化、特に宗教教育である。<sup>43</sup>

第一の点の両親から宗教を継承することについて、コーンウォールは次のようにまとめている。両親は以下のような方法によって、子供たちの宗教アイデンティティの発達に影響を与えている。1. 宗教生活を理解し解釈するための象徴照合 (symbolic reference) を与える。2. 個人的、組織的レベルでの宗教行為のモデリング。3. 同じ信仰と同じグループ意識を持っている人たちとの人間関係に入ることを勧める。<sup>44</sup>

宗教的社会化にとって、第一に重要な要素は、象徴照合あるいは宗教的世界観

の構築である。生活経験を理解し、解釈するためには、世界観あるいは意味付けシステムが必要である。この点について、コーンウォールは以下のように説明している。「人は幼児期の宗教的社会化か、あるいは大人になって生活する世界が変わった場合は、再社会化によって、特定の世界観を身につけて行く。重要な人たち（両親、仲間、教師）との対話によって、個人の意識の中に世界が築かれていく。その世界の主観的現実性は、その対話によって維持されて行く。」<sup>45</sup>

宗教的社会化の第二に重要な要素は、宗教行為のモデリングである。人は他の人の行為を観察することによって、その宗教グループの規範と期待されていることを学ぶ。霊的に高めて行こうと努力している人たちと接していることによって、周囲の人はその人たちのライフスタイルを内に取り入れる（内在化）するのである。<sup>46</sup>

宗教的社会化の第三の要素は、そのグループの人間関係に入ることである。どの宗教グループも、そのメンバーになることを奨励する。社会科学の研究者たちは、次のように考え始めている。「信仰システムを完全に受容する以前に、情緒的な傾倒が形成される。」<sup>47</sup> つまり、特定の宗教を受け入れる過程において、まず感情的に受け入れてから、その後でその信仰内容を完全に受け入れるのである。

宗教的社会化においては、思春期と成人初期が二つの重要な時期である。これらの時期は、身体的、社会的、知的に変化するだけでなく、新しい友人関係や、今までとは別の世界観とそのライフスタイルに出会う可能性が高い。この時期に以前の宗教的アイデンティティを維持できるかどうかは、その宗教への傾倒の強さ、親の世界観がうまく機能するかどうか、模倣してきた行為の有用性によって決まる傾向がある。<sup>48</sup>

## 2. 意図的教授 (intentional teaching)

先ほど考察した社会化は、霊的成長において大変有効な教育方法である。しかし、社会化だけで霊的な成長がすすむわけではない。もう一つの方法である意図的教授が不可欠である。

ここで単に教授とせず、意図的教授としたのは、ただ漠然と教えるのではなく、霊的成長という目標を明確に「意図して」教えることが必要であるからである。意図的教授には、三つのステップが含まれている。第一が聖書知識、第二が批判的省察、第三が実行である。

#### a. 聖書知識（真理を知る）

霊的成長の基礎は、神の言葉にある。キリスト者はみことばに従って考え、行うべきであるが、何よりもまずみことばを知らなくてはそれができない。「聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです。」（2テモテ 3:16-17）。

神について深く知ることは、霊的成長に直接つながる。なぜなら、先にも見たように、霊性は神の基本的な属性であるから、神を知れば知るほど、霊性についての理解が深まるのである。また、理性的に神を知ることがないと、「信仰は感傷性の中に消え去ってしまう。」<sup>49</sup> 私たちが神を知るために、第一に大切なのは聖書（特別啓示）であり、第二に重要なのは神の被造世界（一般啓示）である。

聖書の真理なしには、私たちは自分たちの経験を正しく判断することができない。人間の経験は、不完全であり、部分的で、相対的で、解釈を必要とする。したがって、「理性的によく調べていない経験だけでは、真理を決定するには不十分である。」<sup>50</sup> 経験は、神の言葉によって判断、評価されなければならない。

#### b. 批判的省察（critical reflection）（真理と共に考える）

意図的教授の第二のステップは、批判的省察である。批判的省察とは、聖書の真理を生活経験に適用し、何を教えられるかを神学的に考えることである。このステップは、神の真理に内的に服従することである。これは、神学が本来果たすべき役割とも言える。「神学は、『神との関係』という究極の質問と関連させて、私たちの人生を解釈していく継続のプロセスである。」<sup>51</sup> より一般的な言葉で言えば、「真に神学的な思索とは、キリストの心で考える」<sup>52</sup>ことである。

私たちは、日常生活で経験したことを、自分の持っている解釈の枠組みに照らし合わせて解釈する。その時に、自分が今まで持っていた枠組みでは解釈できないことも起こってくる。

例えば、「神は善であるから、自分に悪いことは起こらない」と信じていた人が、重い病気にかかった場合、その経験（重い病気）は今までの思考の枠組みでは解釈できない。この人にとっては、二つの選択肢がある。一つは従来解釈の枠組みにしがみついて、現実の経験を無視することである。これは、盲信であり、霊的に成長しないケースである。もう一つの選択肢は、自分が信じてきた枠組みを修正したり広げたりして、新たな経験をも解釈できるものにするのである。今の場合で言うなら、苦難の神学をも受け入れた解釈の枠組みをつくることである。



ここに、靈的成長が見られる。

批判的省察の対象は、内容、過程、方法、信念、感情、伝統、目的、動機などすべてであるが、もっとも重要であるのは思考・行動の前提である。他者から質問されたり、別の見方を提供されることによって、その人の前提となっているものがチャレンジされる必要がある。従来の思考・行動の前提の正当性が疑われることによって、より正しく、包括的で、深い関係（神、他の人、自分、被造物との関係）が築かれていくことを目指すのである。この過程において、「神との関係において私は何者であるのか」、「私の人生の目的・使命は何であるのか」を、考えさせられることが大切である。

批判的省察には、個人レベルと共同体レベルのどちらも大切である。個人での批判的省察において、私たちは自分の内を探る。この時、聖書、賛美の歌詞、靈的書物、信条などを黙想することが助けになる。神のみ前で聖霊の光に照らされて、自分自身の罪、弱点、改めるべきところ、やめるべきこと、新しく始めるべきこと、与えられている賜物、生かされている目的、「なぜ自分はこのように考え、このように行動するのか」などを考えることは、大変有益である。工藤信夫氏が述べているように、人は真摯で誠実な問いを神や自分自身に投げかけることによって、神と人へと近づき得る。<sup>53</sup>

批判的省察には、受容し合える共同体の環境が不可欠である。批判的省察には、多くの場合、感情の動揺が伴う。先の例で見たように、自分の経験を既存の枠組みで解釈できなかつた場合、私たちは混乱に陥りがちである。そして、自分の既存の解釈の枠組みを変えなければならなくなつた時、恐れを感じることが多い。批判的省察の過程には、このような感情の揺れが多々あるので、それを受け入れ合う共同体の環境が必要なのである。

また、信仰共同体は、独自の解釈の枠組みを持っている。それは、神の言葉の解釈の仕方、神学、儀式、伝統などである。信仰共同体に属する一人一人の経験が、このような共同体の解釈の枠組みや、他の人たちの別の視点との対話の中で解釈されていく時、個人の解釈の枠組みが変えられ、成長していくことが可能である。また、自由な対話の中で、共同体の解釈の枠組み自体が変えられていくこともありうる。

このように、個人の解釈は共同体の中で正当性が確かめられたり、再解釈されていくのである。個人の内的レベル、共同体レベルでの批判的省察の対話が繰り返されながら、個人としても共同体としても、靈的成長がなされていくのである。

### c. 実行（真理によって行動する）

意図的教授の第三ステップは、実行である。言い換えると、神の真理への服従を外的に現わすことである。批判的省察によって、聖書の真理を生活経験に適用し教えられたことは、再び実生活においてテストされなければならない。変えられた解釈の枠組みが、実際の生活経験を解釈していく上で、正しく機能していくかどうかを試す必要がある。キリスト者は、信じている真理を生活の中で生きなければならない。行ないのない信仰は、死んだものである（ヤコブ 2:17）。私たちは、神のみ前において自分に与えられたミニストリーを実行して行き、自分の使命を確信していくのである。

## 3. 牧師の役割

キリスト者の霊的成長を促すためには、牧師はどのような役割を果たしたらよいのであろうか。以下に三つの提言をしたい。

### a. 霊的成長に努める

牧師は自らの霊性の成長のために、絶えず努力している必要がある。このことが、神と会衆に対しての牧師の最も重要な責任の一つである。説教や牧会の質は、牧師の霊性にかかっている。聖書の真理をよく知り、生活経験を聖書と神学によって批判的に反省し、信仰を实践する努力をすることが大切である。

牧師が霊的成長に励んでいる姿は、教会全体の霊的成長にとって大変有益である。牧師はこの世においてどのようにクリスチャンとして生きるか、どのように聖書の真理を実際の生き方と結び付けて生きるかを示すべきである。よい模範を見ることは、社会化にとってなくてはならないことである。弟子たちによい模範を示し続けられた主イエスの生き方に習うことでもある。しかし、牧師は罪ある人間であるから、主イエスのようには完全な模範を示すことはできない。そうではあっても、自分の失敗や苦勞を分かち合うことが、教会員の成長に大きく貢献するのである。パウロは言っている、「私がキリストを見ならっているように、あなたがたも私を見ならってください。」（1 コリント 11:1）。牧師もこのように言えるような生き方をしたいものである。

モデリングにおいて、最も重要な要素は愛である。なぜなら、人は自分が愛している人を模倣する傾向があるからである。したがって、牧師は信徒を愛し、よい信頼関係を築くことが、自分を真似てくれる信徒がふえることにもなる。

牧師は、自分以外の模範を示すことも大切である。一人の人間の生きざまだけ

では限界があるが、いろいろなものから具体例を示すことによって、バランスの取れた模範を示すことが可能になる。例えば、説教や教育において、聖書や信仰書からいろいろな信仰者を例として用いることができる。

#### b. 霊的指導者（spiritual director）としての役割

牧師は、霊的指導者としての役割を持っていることを自覚する必要がある。牧師は信徒一人一人に目をとめ、その人が今、どのような状況で生き、何を考え、どう感じているのか、どのような霊的状态であるのかを知ることが大切である。さらに、その人が直面している問題や、経験、その人の神学、思考の前提などを、聖書的に照らして、その人自身が批判的に見られるようになるように、対話の中で導くことも重要な役割である。

霊的導きとは、あらゆる日常的出来事、内面の動き、感情などを神との関係で解釈することによって、その人が神と出会うこと、神の恵みを発見すること、神との交わりを深めていくことを助けることである。具体的には、「人々に祈ることを教えること、いろいろな出来事や感情の中で教会員が恵みの実在を見分けるように援助すること、生活のただなかで神の存在を確認すること、巡礼の暗い道程を歩みながら光りの探求を一緒になって行なうこと、心理学的あるいは社会学的にではなく、聖書における霊的な意味における自己理解の形成を導くことなど」<sup>54</sup>である。

アイリス V. カリーは、霊的指導者について以下のように説明している。「霊的指導者とは、霊的成長の過程で共に寄り添って助けてくれる人である。祈りの意味を共に話し合うことができ、渇きや暗さを覚える時、その内容を共に探り、生活の中に祈りのリアリティーをもたらすことのできる人である。 、 、 、 霊的ガイドは、特定の間隔において個人的な交わりを持ち、その人の話しを聞き、カウンセリングし、共に祈る。この過程によって、主観性、感傷性とは一線が引かれる。感謝、悔い改め、請願、とりなしを意識的に導いて行く。」<sup>55</sup>

霊的指導者は、目新しい概念ではない。キリスト教の歴史の大部分において、牧師には霊的導き手としての役割が期待され、牧師は重要な職務として実際にこの役割を果たしてきたのである。<sup>56</sup> 現代の牧師にこの役割が見失われていることは、キリスト教の大きな遺産の喪失である。

#### c. 互いに受容できる環境をつくる

牧師の大切な務めとして、地域教会において霊的成長の環境を創造することが

あげられる。多くの教会でよく見られることであるが、「こんなことを言ったら、裁かれるのではないか」という恐れがある限り、誰も本心から話すことはできない。一人一人が自分の経験を自由に分かち合い、みんなで話し合えるような環境。互いに受け入れ合い、違いを認め、自由に自分の意見を述べることができる環境が、霊的成長には不可欠なのである。牧師は群れのリーダーとして、率先してこのように生き、このような環境づくりに努めなければならない。

#### 4. 霊的成長のために教会への提言

霊的成長を目標とした教育をおこなうために、教会へ 11 の提言をしたい。

##### a. 聖書を通して神に聞く

牧師をはじめ多くのクリスチャンは、聖書を読むことには慣れているが、聖書を通して神に聞くことをしているだろうか。ユージン H. ピーターソンは、読むことと聞くことの違いを次のように説明している。読むことは、書かれた本に別の人が関わることであり、読む人が主導権を握っている。一方、聞くことは、人格と人格との交わりであり、語る人が主導権を握っている。<sup>57</sup> したがって、聖書に聞くことは、主導権がある神と聞く者との交わりである。

現代の学校教育を受けた者にとって、聖書を読むということは、自分に主導権があり、無意識のうちに、聖書から情報を得ることが中心的関心になりがちである。つまり、聖書を読むことが聖書の知識を増すための勉強になってしまいがちなのである。

しかし、聖書に聞く本来の目的は、そこで神と出会い、神との交わりを深めていくことである。人は神との人格的な交わりを通して霊的に成長していくのであるから、「聖書を読む」のではなく「聖書に聞く」ことが強調されなければならない。神が権威を持って語られたことは、聞かれねばならず、聞いた者は従わなければならない。神の言葉に聞き、従うこと、そこに霊的成長がある。

##### b. 効果的な社会化をはかる <sup>58</sup>

筆者の研究によると、日本人は家庭や学校、職場といった自分たちが置かれている組織の価値観を内在化しているようである。その内在化は、各々の組織に深く関わることによって、そしてそこでの影響の大きい人々との人間関係によってもたらされる。

子供の時期は、神のイメージ形成において最も重要な時期の一つである。日本

においては、地域社会と学校教育はキリスト教の神のイメージ形成に、一般に否定的な影響を与えている。そのためキリスト者である親は、自分の子供の信仰継承に対して、きわめて重要な役割を持っていることになる。親は、子供によいモデルを示さなければならない。後でファミリー・ミニストリーの箇所でも述べるが、教会は、親が子供に対してよいミニストリーができるように助けなければならない。

先にも見たように、思春期と成人初期が、宗教的社会化の二つのきわめて重要な時期である。新しい友人、世界観、生活様式に触れて、子供の時から価値観とは異なった価値観を形成しやすい時期である。したがって、親元を離れた学生や新社会人が、最も新しい価値観を受け入れやすいといえる。この年代の人々への伝道は特に大切なことがわかる。また、日本においては、キリスト者の青年たちは、たえず進化論、無神論、ニュー・エイジといった非キリスト教的思想の爆撃を受けている。この青年たちがキリスト教信仰にとどまるかどうかは、キリスト者の親の生き方と子供との関係が重要になってくる。教会は青年に対しては言うまでもなく、その親に対しても強力な支援をしていかなければならない。

新しく救われた人にとっては、回心の後 2~5 年が重要な時期である。この時期には、キリスト教の新しい知識や価値観を熱心に吸収し、周囲のキリスト者と同化してキリスト者のライフスタイルを身に付けていく。それゆえに、この時期は宗教的社会化にとって、最も効果のある時期の一つといえる。教会は、新しく救われた人がキリスト教世界観を形成していけるように助けなければならない。

さらに、日本人がキリスト者になるということは、多くの場合、劇的な変化である。したがって、そこには人間関係の摩擦や価値の衝突を生じやすい。教会は、新しくキリスト者になった人たちへ、実際的な助けと同時に、情緒的にも支えていかなければならない。

### c. 批判的省察を促進する <sup>59</sup>

霊的成長には、批判的省察は不可欠である。マーガレット・ホールは、危機的状況が霊的成長に及ぼす影響を研究した。その結果、危機的状況は霊的成長に必要な条件ではあるが、十分条件ではないことがわかった。霊的成長の鍵は、危機的状況において、自分の今までの信仰を批判的に検討し改定作業をおこなうかどうかであった。<sup>60</sup> コンスタンス・リーアンも、人がいかに不均衡 (disequilibrium) に対処するかが信仰の成長にとって決定的に重要であると述べている。<sup>61</sup>

日本文化は、同一性、協同性、調和、他者への配慮を強調してきた。こういっ

た傾向は、よい面も多々あったが、一般に無批判的な人間を生み出してきた。そのような環境に置かれている日本の教会は、信徒の霊的成長を目指すためには、意図的に均衡を破り、キリスト者の前提としているものにチャレンジを与えるようにすべきである。説教や聖書研究において、人々の神に対する前提あるいは思い込み、考えや行動の前提になっているものが、本当に正しいのかどうか問われなければならない。そのためには、質問を受けたり、他者から違った視点を与えられる必要がある。

#### d. キリスト者をこの世界で生きられるように整える<sup>62</sup>

日本のキリスト者は、自分の信仰を教会の枠の中でしか考えない傾向がある。例えば、牧師は信徒の信仰の成長のためには、聖書を読み、祈り、集会に出席することを強調する。この主張自体は正しいであろうが、大きく見落とされていることがある。それは、日常生活経験が信仰に大きく影響を与えているということである。信仰と生活経験は、実際は分離不可能である。入学、就職、結婚、子供が与えられるといったような人生における大きな出来事は、霊的成長の貴重な機会を与えてくれる。

教会は、信徒が人生経験を霊的成長に結び付けられるように助けるべきである。そのためにも、人生経験を神学的に理解できるような備えが必要である。例えば、学校生活の神学、職場の神学、結婚・家庭生活の神学などというものが、もっと積極的に考えられるべきであろう。ちなみにアメリカやカナダでは、フラー神学校のロバート・バンクス やリージェント・カレッジのポール・スティーブンスなどが中心になって、日常生活を神学的に理解する努力が積極的になされている。<sup>63</sup> プロテスタントの伝統においても、霊性の中心的側面は、「信仰と日常生活の完全な統合」<sup>64</sup>であった。霊的な人とは、「この世にあって神のために生き、神に応答する人」<sup>65</sup>のことである。

成人の学習の特徴の一つは、いつか役に立つ教養を身に付けることよりも、現実に関与している問題を解決しようとするのが動機づけになっていることである。キリスト者は、各々のライフステージで直面する問題についての神学と実際的な解決の知恵を学ぶべきである。同じ問題を抱えた人たちで作るサポート・グループの中で、共に問題を考え、祈り、助け合っていくことは、大きな霊的成長につながる。

日本のキリスト者にとっては、日本社会の特徴を知り、どのように対処すべきかを知る必要もある。日本の宗教の特徴の一つは、「非一排斥的性質」<sup>66</sup>である。

「ほとんどの日本の宗教は、(一般レベルにおいては)神学的信念とその表現に関心があるというよりも、やって見せること(パフォーマンス)や儀式が中心である。」<sup>67</sup> さらに、日本社会は強力な同一化傾向がある。言い換えると、日本社会は違いを認めにくい。

しかしながら、キリスト教は排他的で知的性質を持っている。したがって、日本人がキリスト者になった場合、キリスト教的価値観と日本社会が持っている価値観との間に、しばしば衝突を経験することになる。この衝突は、特に職場や家庭、地域社会において生じやすい。日本人キリスト者は、非キリスト教的宗教行事に参加するように強い圧力を感じる人が多い。

多くの日本人にとって、人生の中で仕事がいちばん重要な領域になっている。特に、20代の中に自分の会社の価値観を植え付けられている。<sup>68</sup> 仕事は、宗教に関わることによってもたらされる社会心理的利益にとって変わるようなものを提供している。仕事は、価値とアイデンティティ、社会的関係を与える源としての役割を果たし得る。<sup>69</sup>

日本の教会は、クリスチャンが以上のような日本社会で生きられるように整える責任がある。まず、キリスト教的世界観の形成のために努力しなくてはならない。そのためには、先に考察した社会化や意図的教授が参考にならう。また、自分たちの日常の経験を分かち合うことを奨励すべきである。さらに、自分たちの信じている信仰を弁証し、広めて行けるように訓練される必要がある。信仰的に妥協することなく、この世と関わって行く方法を知ることが大切である。

#### e. 困難な経験への備えをする<sup>70</sup>

困難な経験は、霊的成長にとって肯定的にも否定的にも影響し得る。肯定的な影響の場合は、困難な経験を通して神への信頼を増して行く。それに対して、否定的な影響の場合、なぜ神がこのような苦難を自分にもたらされたのかと神に対する信頼が揺らぐ。

同じ困難な経験をして、どうしてこのように肯定的にとらえたり否定的にとらえるという違いが生じるのであろうか。その主な違いは、神学的理解の違いによるものであろう。もし、苦難について聖書的な理解をしっかりと持っているなら、おそらく苦難の中でも神を信頼し続けることができるであろう。その経験を通して、さらに神を信頼するようになり、霊的に成長していくのである。

このように考えてみると、教会が苦難の聖書的理解を教えることがいかに重要であるかがわかる。説教において、牧師は困難を経験した人々の例を聖書やその

他の箇所から紹介することも有効である。

また、実際に苦難の中を通っている人々は、孤独を覚え、自分が神に見捨てられたと感じていることが多い。教会はそのような人々を支え、祈り、実際の助けを提供すべきである。困難の中にある人が、みんなから愛されていると感じることができるようにし、神に信頼し続けることができるように助ける必要がある。

#### f. 礼拝の刷新

先に見たように、霊的成長を妨げる一つの問題としては、日曜礼拝が後の6日間の現実生活と遊離しがちであることが挙げられた。

牧師が語るメッセージがたとえ正しくても、聞いている人々の生活と関連のないものであるなら、その教会は容易に「死んだ正統主義」に陥ってしまう。人々は喜びや命を感じるができない。これが今日の日本の教会によく見られる深刻な問題の一つである。

この問題を解決するためにも、牧師は信徒の生活をよく知っていなければならない。もし、牧師が信徒一人一人の日常経験をよく知っているなら、その経験を聖書の真理に照らし合わせてどのように解釈したらよいのかを助けることができる。それが、聞いている者にとっては、生きる命になり、喜びになり、霊的に成長していくことになるのである。礼拝説教が後の6日間のエネルギーになるべきである。

礼拝に関して、霊的成長を妨げている第二の問題は、牧師が礼拝の前面に出て、信徒が受身になっていることである。礼拝は教会全体で神に捧げるものである。牧師や賛美リーダーがパフォーマンスをして、信徒が観客として見るというのは間違いである。礼拝は、「クリスチャン共同体の信仰の表現として、また信仰が養われる時として、第一に重要な行事である。」<sup>71</sup>

礼拝の第一の目的は、神をあがめることであるが、霊的成長にとっても不可欠である。なぜなら、礼拝においては、霊性のすべての側面（身体的、知的、情緒的、社会的、道徳的）が統合され、養われ、表現されるのである。礼拝は、すべてのメンバーによって共有された信仰の祝いの場となるように努めなければならない。

#### g. 参加型教育の必要性

多くの実験・研究によって明らかなように、教育において、参加の程度が高け



れば高いほど、被教育者に大きな変化が期待できる。ジェームズ・マイケル・リーは、この点を次のように要約している。関連する実証的研究によって、以下のことが明らかにされてきた。1. 知的教育は知的学習を生み出すが、非知的なことを獲得するにはあまり効果はない。2. 感情に訴える教育 (affective teaching) は感情の変化をもたらすだけでなく、知的なことの習得にも大きく影響する。3. ライフスタイル教育は、ライフスタイルの変化をもたらすだけでなく、知的、情緒的な変化をももたらす。<sup>72</sup>

このように、日本の教育の主流であり、教会においても主流である知識習得型教育では、参加者の内に大きな変化をもたらすことは期待できない。もし、本当に霊的成長を願い、行動にまで変化が現れることを望むなら、できる限り積極的に参加できるような教育を工夫しなければならない。

#### h. 霊的成長を目指す教会学校

発達心理学の知識に基づいて、カリーは霊的成長を目指す教会教育に対して以下のような有益な助言を与えてくれている。<sup>73</sup>

教会の育児室 (nursery) は、単に乳幼児を預かる以上の重要な役割を持っている。この場所が、地域教会にとっては霊的養育が最初になされる場である。ここでは、愛を持ってやさしく世話をする環境を整えることが重要である。小さい子供たちは、自分が信頼している人の言うことを「真理」として受け入れる傾向がある。教師たちは、神の愛を実際に示し、教える、彼らの霊的ガイドである。

愛情ある大人に育てられ、信頼することを学んだ乳幼児は、神を信頼することにも困難を覚えない。2歳から5歳の子供は、ほとんど彼らの行動と環境から霊的な生活を学んでいく。<sup>74</sup> 4、5歳の子供は何が神に受け入れられるか (神の権威) について理解できる。また、彼らの健康な霊性の発達のためには、神の裁き以上に赦しと回復の確かさを教えた方がよい。<sup>75</sup>

小学生になると、教会や家庭で神の存在が確かなものとして信じられていると、神の超越性と内在性が生活経験の一部になってくる。<sup>76</sup> 高学年になると、信仰が自分自身のものとなり、はっきりとした信仰告白する子どもでてくる。<sup>77</sup>

小学生を担当する教師は、引き続き、祈り、聖書、個人的経験を用いることによって、子供たちの霊的成長を助けることが大切である。この年齢の子供たちは、聖書の登場人物を理解することができる。教師は、そういった人物をただ理想化してしまわずに、弱さをも示すことによって貴重なレッスンを教えることができる。また、聖書物語などによって、子供たちの想像力を養うことも、霊的成長に

貢献する。

思春期になると、性的発達や人生の目的を探ることの中で、人生の霊的次元に気づかされることが多い。教師は、彼らの霊的、心理的ニーズに敏感になって助けることが必要である。

成人にとっては、結婚のさまざまな問題が霊的成長に結びつくこともある。中年になると、苦しみや救いのより深い意味を発見する人も見られる。高齢者にとっては、受容と心の落ち着きが霊的成熟の印となる。そういう人は、「わたしの願うようにではなく、あなたのみこころのように、なさってください」（マタイ 26:39）、「完了した」（ヨハネ 19:30）と言われたイエスの気持ちがよく理解できるのである。<sup>78</sup>

#### i. スモール・グループの刷新

互いに励まし合い、互いに徳を高め合う（1テサロニケ 5:11）ためには、小人数の同じメンバーが定期的集まるスモール・グループは最適の形態である。スモール・グループにおいてなされることは、祈り、聖書研究、信仰書の読書、弟子訓練、奉仕活動、互いに支えること（アルコール中毒、シングル・マザーなど）など、その教会や地域のニーズに応じて柔軟であってよい。

日本の教会においては、伝統的に祈祷会、聖書研究会などにスモール・グループが用いられてきた。しかし、そこで行なわれてきたことは、牧師が一方向的に教え、参加者はそれを聞くということが中心であった。これでは、スモール・グループのよさがほとんど活かされず、参加者の霊的成長にも貢献が少ない。

先の牧師の役割でも述べたように、スモール・グループこそ、どんな生活経験であっても分かち合える場とすべきである。弱さ、失敗を出せない所には、本当の成長もない。一人一人が自分の経験を自由に分かち合い、みんなで話し合い、互いに受け入れ合い、違いを認め合える環境が、霊的成長には不可欠なのである。

牧師や司会者は、このような環境を整える人でなければならない。スモール・グループで大切なことは、何を学ぶか以上に「脅かさない環境」（non-threatening environment）を整えることである。

スモール・グループのリーダーは、このような雰囲気の中で、参加者がみんなで生活経験をみことばの真理によって正しく解釈していけるように、陰で助けることも大切である。このようにスモール・グループの特性が十分に活かされれば、霊的成長に最も役立つ方法の一つとなり得る。

#### j. 受洗準備クラス・受洗後クラスの充実

日本の教会の弱点の一つとして、信仰から離れていく人が多いことが挙げられる。<sup>79</sup> 正確な統計はないが、今まで見聞きしてきた限りでは、受洗者の半数から、3分の2くらいの人が信仰から離れているようである。これは、離れて行った人たちの問題という以上に、教会の問題であろう。多くの教会が、受洗準備と受洗後の教育をしっかりとこなかった結果がこのような形で現れているように思われる。

「三つ子の魂百まで」というのは、キリスト者人生においても当てはまるであろう。救われる前後3年間に、しっかりとした信仰教育、訓練を受けた人は、しっかりとした信仰者生涯を送る可能性が高い。ただでさえ、キリスト者が少ない現実があるのだから、少ない受洗者であっても確実に育てる努力が必要である。信仰者の霊的成長を望むなら、受洗準備クラス・受洗後クラスの充実は急務である。

#### k. ファミリー・ミニストリーの重要性

教会の環境は霊的成長にとって大きな影響を与えているが、家庭も教会の環境に勝るとも劣らない影響を及ぼしている。普通の人々が過ごすのは、会堂内におけるよりも家庭におけるほうがずっと長い。また、子供たちの人格形成に及ぼす影響も、家庭環境が一番大きいと言ってよいであろう。キリスト者の子供であれ、大人であれ、家庭環境は霊的成長に大きく関わっている。

日本の教会においても、家庭の大切さは認識されていたであろうが、家庭に関するミニストリーと言えば、家族への伝道、結婚カウンセリング、子育て、結婚式、葬式などに重点が置かれ、家族全体の霊的成長を促すために家庭環境を整えることを助けることまで考えてこなかった。

ファミリー・ミニストリーでは、広範な領域・問題を扱うが、以下にその一部を示してみたい。<sup>80</sup> 結婚準備教育、結婚教育（夫婦間のコミュニケーション、問題への対処の仕方、性、出産、会計など）、子育て教育、問題を抱えた家庭への支援、独身者、高齢者家庭など。

現在の日本の家庭は、離婚の増加、子育てできない親の増加、高齢化など深刻な問題に直面している。家庭に関する問題で、霊的成長に関わらない問題はない。今後は、日本の教会も教会にかかわっている家族全員、地域の家庭全体を視野に入れた包括的なファミリー・ミニストリーに真剣に取り組むべきであろう。

## 結 論

「あなたはどのような教会形成を目指すか。」この問いかけに対して、本論文において、私は二つの解答を示そうと試みた。一つは、教会形成は聖書に基づいてなされるべきである、ということ。その具体的内容を第一部にまとめた。もう一つの答えは、霊的成長を目指す教会形成をしたい、ということで、具体的な内容を第二部にまとめた。

教会は、キリストの体であるから、頭(かしら)であるキリストが望まれるように形成されなければならない。それは、神の啓示の書である聖書に基づいて、教会が形成されることを意味している。聖書によると、教会はキリストを信じる者たちの集まりであり、神の栄光を現わし、神に仕えるために存在している。

すべてのキリスト者には、神から与えられた賜物があり、それをを用いて果たすべき使命がある。つまり、一人一人にその人しかできない貴重なミニストリーが神から与えられている。牧師の最も重要な働きは、このミニストリーを一人一人が効果的に実行できるように、整え、訓練し、支えることである。地域教会は、神の民がミニストリーを充分果たせるように整えるセンターである。

日曜日の礼拝とか、祈り会の時は集まった状態の教会、他の時は散らばった状態の教会である。たとえ散らばった状態の教会であっても、つながりは決して切れていない。離れていても、互いに霊的交わりでしっかりつながっているのである。集まった状態の時、共に礼拝し、祈り、整えられ、力づけられて、家庭、職場、学校という自分のミニストリー(奉仕・宣教)の現場に遣わされて行くのである。教会は集まったり、散らばったりという伸縮を繰り返しながら、たえず神の国を成長させていくアメーバのような有機体なのである。ダイナミックに暖かく、生きているキリストの体、これが、私が目指して行きたい教会の姿である。

霊的成長に関しては、日本の教会は、それを妨げるさまざまな問題をかかえている。今まで日本の教会では、信徒が霊的に成長するためには、「聖書を読み、祈り、集会に出席しなさい」と繰り返されるばかりであった。これらは、どれも大切なことであるが、教育的に、どうしたら霊的成長を具体的に助けることができるのかは、ほとんど考えられてこなかった。

霊的成長を教育的に考えていく場合、特に社会化と意図的教授を教会のプログラムの中に有効に用いるべきである。意図的教授には、聖書知識、批判的省察、実行という三つのステップが含まれる。日本文化と日本の教育は、無批判的な人間を養成してきたので、日本の教会に一番欠けているのは、批判的省察であろう。

自らの思考や行動の前提・動機、生活経験などを聖書の真理によって照らされ、反省するという厳しい過程が、靈的成長には不可欠である。最近注目されている弟子訓練にしても、もし牧師に無批判的に従う信徒を養成することになるなら、本当の意味での靈的成長、弟子づくりは困難であろう。

牧師自身、自らの靈的成長に努め、靈的指導者としての役割を自覚し、互いに受け入れ合い、成長していける環境をつくるために努力すべきである。教会全体の靈的成長にとって、牧師の役割は非常に大きく、牧師の姿勢にかかっていると云っても過言ではない。

本論の最後で、教会に対して 11 の提言を示した。いずれの提言についても改革は容易ではないであろう。しかし、真剣に靈的成長を目指すなら、取り組まざるを得ない課題であると確信している。これらの提言は、一般論ではなく、提言した私自身に問われている課題である。「あなたはどのような教会形成を目指すか。」私は、これらの具体的な課題に取り組みながら、本当の意味で、靈的に成長し、神に喜ばれる教会を形成していきたいと願っている。

最後に、私が目指している牧師像を、ナーウエンの言葉を借りて表し、この論文を閉じたい。

「これからの時代のクリスチャン指導者は、神学者であるべきです。ここで言う神学者とは、神の心を知る者のことであり、祈りと学びと注意深い分析によって、一見、意味も目的もなく起こっているかのように見えるその時代の出来事のため、神の聖なる救いの業をはっきりと示すことのできる訓練を受けた者のことです。」<sup>81</sup>

- 
- 1 Millard J. Erickson, Christian Theology, (Grand Rapids, Mich.: Baker Book House, 1989), p. 514.
  - 2 Walter A. Elwell ed. Evangelical Dictionary of Theology. (Grand Rapids, Mich.: Baker Book House, 1984), S.v. “The Church,” by R. L. Omanson. p.231.
  - 3 Walter Bauer, A Greek-English Lexicon of the New Testament and Other Early Christian Literature. (Chicago, Ill.: The University of Chicago Press, 1979), pp.240-41.
  - 4 Erickson, Christian Theology, p. 1034.
  - 5 Bruce Milne, Know the Truth. (Downers Grove, Ill.: InterVarsity Press, 1982). p.221.
  - 6 小畑進 “礼拝” 『新聖書辞典』 (いのちのことば社、1985年)、p. 1384。
  - 7 山崎順治 “礼拝” 『新キリスト教辞典』 (いのちのことば社、1991年)、p. 1243。
  - 8 Milne, Know the Truth. pp. 222-23.
  - 9 Erickson, Christian Theology, pp. 1055-56.
  - 10 Elwell ed. Evangelical Dictionary of Theology. S.v. “Ministry,” by W. L. Liefeld. pp. 721-22.
  - 11 R. A. Bodey, “Ministry” The Zondervan Pictorial Encyclopedia of the Bible, vol.4. Merrill Tenney ed. (Grand Rapids, Mich.: Zondervan Publishing House, 1975).
  - 12 G. W. Bromiley, “Ministry” The International Standard Bible Encyclopedia. vol.3. (Grand Rapids, Mich.: William B. Eerdmans Publishing Company, 1986), pp.365-70.
  - 13 牧師と信徒の関係について、聖書から論じた好著としては、ジョン・ストット 『今求められる牧師と信徒のあり方』 石黒則年訳、(いのちのことば社、1990年) がある。
  - 14 新約聖書においては、bishop, elder, pastor はニュアンスの差はあるが、同じ職務を指して用いられている。elder と bishop という語は、以下の箇所  
で交換可能な語として用いられている：使徒 20:17、20:28、テトス 1:5、1:7、  
1テモテ 3:1、5:17、1ペテロ 5:1、ピリピ 1:1。また、elder または bishop  
は以下の箇所では pastor と同じ意味で用いられている：使徒 20:28、1ペ  
テロ 2:25、5:1-2。
  - 15 D. G. Stewart, “Bishop (Elder)” The Zondervan Pictorial Encyclopedia of the Bible, vol.1. Merrill Tenney ed. (Grand Rapids, Mich.: Zondervan Publishing House, 1975). p.618.
  - 16 L. Coenen, “Bishop, Presbyter, Elder” The New International Dictionary of New Testament Theology. vol. 1. Colin Brown ed. (Grand Rapids, Mich.: Zondervan Publishing House, 1975), pp.188-201.
  - 17 Ibid.
  - 18 Ibid.
  - 19 井出定治 『信徒といっしょの牧会』 (いのちのことば社、1997年)、p. 38。
  - 20 Grant Osborne. “A Biblical Model of Pastor/Elder Leadership.”(Deerfield,

- 
- Ill.: Trinity Evangelical Divinity School. n.d.), Photocopied. p.12.
- <sup>21</sup> デビッド・J・ヘッセルグレーブ “日本における開拓伝道について：ヘッセルグレーブ博士へのインタビュー” 『R・A・C ジャーナル』 第4号（1998年、3月）、p. 69。
- <sup>22</sup> Donald Carson. “Lecture on Larry Richards.” (Deerfield, Ill.: Trinity Evangelical Divinity School. n.d.), Photocopied. p.27.
- <sup>23</sup> 聖書に基づいたビジョンを持つことの重要性を説いた必読書として、リック・ウォレン『健康な教会へのかぎ』河野勇一訳編、(いのちのことば社、1998年) がある。
- <sup>24</sup> Robert L. Saucy, The Church in God’s Program. (Chicago, Ill.: Moody Press, 1972), p.142.
- <sup>25</sup> E. H. ピーターソン 『牧会者の神学－祈り・聖書理解・霊的導き』越川弘英訳、(日本基督教団出版局、1997年)、p. 207。
- <sup>26</sup> David Mains, “My Greatest Ministry Mistakes,” Leadership 1 (Spring 1980): 20.
- <sup>27</sup> 松田一男 “神の属性” 『新キリスト教辞典』(いのちのことば社、1991年)、p. 177。
- <sup>28</sup> Erickson, Christian Theology, p.277.
- <sup>29</sup> Ibid. p.970.
- <sup>30</sup> Ibid. p.514.
- <sup>31</sup> J. C. Ryle, Holiness. (Durham: Evangelical Press, 1879), p. 91.
- <sup>32</sup> Craig M. Gay, “The Worries of This Life, the Deceitfulness of Wealth, and Secularization in Modern Society,” in Alive to God, ed. J. I. Packer and Loren Wilkinson (Downers Grove, Ill.: InterVarsity Press, 1992), p.215.
- <sup>33</sup> Ibid. p.216.
- <sup>34</sup> Ted Ward, Values Begin at Home. 2nd. ed. (Wheaton, Ill.: Victor Books, 1989). pp.18-20.
- Perry G. Downs, Teaching for Spiritual Growth. (Grand Rapids, Mich.: Zondervan Publishing House, 1994), pp.74-75.
- <sup>35</sup> Milne, Know the Truth. pp.194-95.
- <sup>36</sup> Richard F. Lovelace, Dynamics of Spiritual Life, (Downers Grove, Ill.: InterVarsity Press, 1979), p.168.
- <sup>37</sup> Milne, Know the Truth. p.225.
- <sup>38</sup> 片岡伸光、その他 『今日における「霊性」と教会』(いのちのことば社、1997年)、p. 47。
- <sup>39</sup> 『前掲書』 p. 12。
- <sup>40</sup> 宇田進 『福音主義キリスト教とは何か』(いのちのことば社、1984年)、pp. 122-23。
- <sup>41</sup> Howard A. Snyder. Signs of the Spirit: How God Reshapes the Church. (Grand Rapids, Mich.: Zondervan Publishing House, 1988), p.312.
- <sup>42</sup> Downs, Teaching for Spiritual Growth. p.164.
- <sup>43</sup> Marie Cornwall. “The Influence of Three Agents of Religious Socialization: Family, Church, and Peers.” In The Religion and Family

- 
- Connection: Social Science Perspective. ed. Darwin L. Thomas, 207-31. (Provo, Utah: Religious Studies Center, Brigham Young University, 1988), p.208.
- 44 Ibid. p.227.
- 45 Ibid. p.209.
- 46 Iris V. Cully, Education for Spiritual Growth. (Grand Rapids, Mich.: Zondervan Publishing House, 1984), p.23.
- 47 Cornwall, p.228.
- 48 Ibid. p.229.
- 49 Cully, Education for Spiritual Growth. p.98.
- 50 Arthur F. Holmes, All Truth Is God's Truth. (Grand Rapids, Mich.: Wm. B. Eerdmans Publishing House, 1977), p.83.
- 51 Jack L. Seymour, Margaret Ann Crain, and Joseph V. Crockett. Educating Christians: The Intersection of Meaning, Learning, and Vocation. (Nashville, Tenn.: Abingdon Press, 1993), p.29.
- 52 ヘンリ・ナーウエン『イエスの御名で』後藤敏夫訳 (あめんどう、1993年)、p. 89。
- 53 工藤信夫『信仰者の自己吟味 — 神と人、信仰を語る —』(いのちのことば社、1995年)、p. 8。
- 54 E. H.ピーターソン『前掲書』pp. 189-190。
- 55 Cully, Education for Spiritual Growth. pp.159-60.
- 56 E. H.ピーターソン『前掲書』第3章「霊的導き」は、この点について貴重な示唆を与えてくれる。
- 57 『前掲書』p. 116。
- 58 Hiromitsu Matsubara, “Japanese Culture and the Adult Christian Faith” (Ph.D. dissertation, Trinity International University. 1997). pp.212-14.
- 59 Ibid. pp.215-17.
- 60 C. Margaret Hall. “Crisis as Opportunity for Spiritual Growth.” Journal of Religion and Health 25,1 (1986): 15.
- 61 Constance Leean. Faith Development in the Adult Life Cycle: Module 2, rev. ed. (Minneapolis, Minn.: Religious Education Association, 1985), p.36.
- 62 Matsubara. pp.217-19.
- 63 最近注目されている本としては、次のものがある。Robert Banks and R. Paul Stevens. ed. The Complete Book of Everyday Christianity: An A-to-Z Guide to Following Christ in Every Aspect of Life. (Downers Grove, Ill.: InterVarsity Press, 1997)
- 64 アリスター・マグラス『キリスト教の将来と福音主義』島田福安訳 (いのちのことば社、1995年)、p. 175。
- 65 『前掲書』同頁。
- 66 Michael Ashkenazi. “Local Japanese Responses to Missionary Activities.” Social Compass 38,2 (1991): 142.
- 67 Ibid. p.143.
- 68 George W. England and Jyuji Misumi. “Work Centrality in Japan and



- 
- the United States.” Journal of Cross-Cultural Psychology 17,4 (1986):411.
- <sup>69</sup> David De Vaus and Ian McAllister. “Gender Differences in Religion: A Test of the Structural Location Theory.” American Sociological Review 52, 4 (1987): 480.
- <sup>70</sup> Matsubara. pp.219-20.
- <sup>71</sup> Louis Weil. “Facilitating Growth in Faith Through Liturgical Worship,” in Handbook of Faith, ed. James Michael Lee. (Birmingham, Ala.: Religious Education Press, 1990), p.219.
- <sup>72</sup> James Michael Lee. ed. Handbook of Faith, (Birmingham, Ala.: Religious Education Press, 1990). pp.299-300.
- <sup>73</sup> Cully, Education for Spiritual Growth. pp.138-39.
- <sup>74</sup> Ibid. p.127.
- <sup>75</sup> Ibid. p.128.
- <sup>76</sup> Ibid. p.129.
- <sup>77</sup> Ibid. p.130.
- <sup>78</sup> Ibid. p.136.
- <sup>79</sup> Patrick Johnstone, Operation World. 5th.ed. (Grand Rapids, Mich.: Zondervan Publishing House, 1993), p.324.
- <sup>80</sup> Charles M. Sell. Family Ministry. 2d. ed. (Grand Rapids, Mich.: Zondervan Publishing House, 1995) 参照。
- <sup>81</sup> ヘンリ・ナーウェン『前掲書』p. 92。

---

参考文献

- 井出定治『信徒といっしょの牧会』いのちのことば社、1997年。  
いのちのことば社出版部『新聖書辞典』いのちのことば社、1985年。  
\_\_\_\_\_『新キリスト教辞典』いのちのことば社、1991年。  
ウォレン、リック『健康な教会へのかぎ』河野勇一訳編、いのちのことば社、1998年。  
宇田進『福音主義キリスト教とは何か』いのちのことば社、1984年。  
片岡伸光、その他『今日における「霊性」と教会』いのちのことば社、1997年。  
工藤信夫『信仰者の自己吟味 — 神と人、信仰を語る —』いのちのことば社、1995年。  
ストット、ジョン『今求められる牧師と信徒のあり方』石黒則年訳、いのちのことば社、1990年。  
ナーウエン、ヘンリ『イエスの御名で』後藤敏夫訳、あめんどう、1993年。  
ピーターソン、E. H.『牧会者の神学—祈り・聖書理解・霊的導き』越川弘英訳、日本基督教団出版局、1997年。  
ヘッセルグレーブ、デビッド・J. “日本における開拓伝道について：ヘッセルグレーブ博士へのインタビュー”『R・A・C ジャーナル』第4号（1998年、3月）、pp. 67-71。  
マグラス、アリスター『キリスト教の将来と福音主義』島田福安訳、いのちのことば社、1995年。

- Ashkenazi, Michael. “Local Japanese Responses to Missionary Activities.” Social Compass 38,2 (1991): 141-54.
- Bauer, Walter. A Greek-English Lexicon of the New Testament and Other Early Christian Literature. Chicago, Ill.: The University of Chicago Press, 1979.
- Bromiley, G. W. ed. The International Standard Bible Encyclopedia. vol.3. Grand Rapids, Mich.: William B. Eerdmans Publishing Company, 1986.
- Brown, Colin. ed. The New International Dictionary of New Testament Theology. vol. 1. Grand Rapids, Mich.: Zondervan Publishing House, 1975.
- Carson, Donald. “Lecture on Larry Richards,” Deerfield, Ill.: Trinity Evangelical Divinity School. n.d., Photocopied.
- Cornwall, Marie. “The Influence of Three Agents of Religious Socialization: Family, Church, and Peers.” In The Religion and Family Connection: Social Science Perspective. ed. Darwin L. Thomas, 207-31. Provo, Utah: Religious Studies Center, Brigham Young University, 1988.
- Cully, Iris V. Education for Spiritual Growth. Grand Rapids, Mich.: Zondervan Publishing House, 1984.

- 
- De Vaus, David and Ian McAllister. "Gender Differences in Religion: A Test of the Structural Location Theory." American Sociological Review 52,4 (1987): 472-81.
- Downs, Perry G. Teaching for Spiritual Growth. Grand Rapids, Mich.: Zondervan Publishing House, 1994.
- Elwell, Walter A. ed. Evangelical Dictionary of Theology. Grand Rapids, Mich.: Baker Book House, 1984.
- England, George W. and Jyuji Misumi. "Work Centrality in Japan and the United States." Journal of Cross-Cultural Psychology 17,4 (1986): 399-416.
- Erickson, Millard J. Christian Theology, Grand Rapids, Mich.: Baker Book House, 1989.
- Gay, Craig M. "The Worries of This Life, the Deceitfulness of Wealth, and Secularization in Modern Society," in Alive to God, ed. J. I. Packer and Loren Wilkinson. Downers Grove, Ill.: InterVarsity Press, 1992, pp.213-24.
- Hall, C. Margaret. "Crisis as Opportunity for Spiritual Growth." Journal of Religion and Health 25,1 (1986): 8-17.
- Holmes, Arthur F. All Truth Is God's Truth. Grand Rapids, Mich.: Wm. B. Eerdmans Publishing House, 1977.
- Johnstone, Patrick. Operation World. 5th.ed. Grand Rapids, Mich.: Zondervan Publishing House, 1993.
- Lee, James Michael. ed. Handbook of Faith. Birmingham, Ala.: Religious Education Press, 1990.
- Leean, Constance. Faith Development in the Adult Life Cycle: Module 2, rev. ed. Minneapolis, Minn.: Religious Education Association, 1985.
- Lovelace, Richard F. Dynamics of Spiritual Life, Downers Grove, Ill.: InterVarsity Press, 1979.
- Mains, David. "My Greatest Ministry Mistakes," Leadership 1 (Spring 1980):15-22.
- Matsubara, Hiromitsu, "Japanese Culture and the Adult Christian Faith" Ph.D. dissertation, Trinity International University. 1997.
- Milne, Bruce. Know the Truth. Downers Grove, Ill.: InterVarsity Press, 1982.
- Osborne, Grant. "A Biblical Model of Pastor/Elder Leadership." Deerfield, Ill.: Trinity Evangelical Divinity School. n.d., Photocopied.
- Ryle, J. C. Holiness. Durham: Evangelical Press, 1879.
- Saucy, Robert L., The Church in God's Program. Chicago, Ill.: Moody Press, 1972.
- Sell, Charles M. Family Ministry. 2d. ed. Grand Rapids, Mich.: Zondervan Publishing House, 1995.
- Seymour, Jack L., Margaret Ann Crain, and Joseph V. Crockett. Educating Christians: The Intersection of Meaning, Learning, and Vocation. Nashville, Tenn.: Abingdon Press, 1993.
- Snyder, Howard A. Signs of the Spirit: How God Reshapes the Church.

- 
- Grand Rapids, Mich.: Zondervan Publishing House, 1988.
- Tenney Merrill ed., The Zondervan Pictorial Encyclopedia of the Bible,  
vol.1. Grand Rapids, Mich.: Zondervan Publishing House, 1975.
- \_\_\_\_\_ ed., The Zondervan Pictorial Encyclopedia of the Bible,  
vol.4. Grand Rapids, Mich.: Zondervan Publishing House, 1975.
- Ward, Ted. Values Begin at Home. 2nd. ed. Wheaton, Ill.: Victor Books,  
1989.
- Weil, Louis. "Facilitating Growth in Faith Through Liturgical Worship,"  
in Handbook of Faith, ed. James Michael Lee. Birmingham, Ala.:  
Religious Education Press, 1990, pp.203-20.